

氏名 (生年月日)	ニシ モト シ ホコ 西 本 志保子	(1957 年 8 月 4 日)
学位の種類	博士 (史学)	
学位記番号	文博甲第 157 号	
学位授与の日付	2023 年 3 月 16 日	
学位授与の要件	中央大学学位規則第 4 条第 1 項	
学位論文題目	縄紋時代中期後葉連弧文土器の研究 —その系譜と展開—	
論文審査委員	主査 小林 謙一 副査 白根 靖大・櫻井 準也	

内容の要旨及び審査の結果の要旨

1 本論文の構成

序章 本研究の目的と方法

第 1 章 連弧文土器の研究史—系譜と変遷に関する議論を中心に—
はじめに

1. 第 1 期：1940 年『日本先史土器図譜』以降 1960 年代まで
2. 第 2 期：1970 年以降 1990 年代前半まで
3. 第 3 期：1990 年代後半以降現在まで

おわりに

第 2 章 連弧文土器の編年的考察—文様要素を中心にして—

はじめに

第 1 節 分析の方法

第 2 節 分析

第 3 節 編年的考察

第 4 節 まとめと展望

おわりに

第 3 章 南西関東における連弧文土器の文様割付

はじめに

第 1 節 文様割付復元の研究史

第 2 節 対象資料と方法

第 3 節 分析

第 4 節 まとめと考察

- おわりに
- 第4章 周辺地域における連弧文土器の文様割付
 - はじめに
 - 第1節 連弧文土器の内訳
 - 第2節 分析
 - 第3節 考察
 - おわりに
- 第5章 連弧文土器の出現と展開
 - はじめに
 - 第1節 連弧文土器の出現について
 - 第2節 連弧文土器の分布範囲
 - おわりに
- 第6章 まとめと展望
 - はじめに
 - 第1節 連弧文土器の成立と展開
 - 第2節 連弧文土器とは何か
 - おわりに

2 本論文の要旨

本論文は、縄紋時代中期の連弧文土器に関する研究である。特に、地域毎の文様割付けのあり方を検討し、型式学的な検討と併せて、変遷、系統性について論じている。その結果、独自の系統を持って一定の時間、特定の地域に存在する土器群であり、「連弧文式土器」として独自の型式として設定する必要を指摘する。

序章では、本研究の目的と方法について説明している。

第1章では、連弧文土器に関する先行研究について、時期を第1期から第3期に分けて整理し、系譜問題に関して未だに統一見解があるとは言えない状況であること、土器型式として認められるのかという問題が棚上げされた現状であることを指摘している。

第2章では、連弧文土器の模式図を作成した際に取得した文様要素のデータから、セリエーション手法を用いて数量的分析をおこない、連弧文土器の変遷を明らかにした。その結果を基に、連弧文土器の変遷について5期に分けて編年的考察をおこなっている。

第3章では、南西関東の連弧文土器301個体の「文様割付の計測」をおこない、模式図を作成した。その計測データを用いて、主に連弧文土器のアイデンティティといえる弧の施文について統計学的分析をおこない、弧の施文の正確性について、相模野台地・多摩丘陵・鶴見川流域・武蔵野台地の4つの地域に分けて分析をおこなった結果、連弧文土器の時期差・地域差が明確になり、相模野台地で最も時期が古く、弧も比較的正確に施文された、典型的とされる連弧文土器を作っている

こと、時期が新しくなるにつれて中心地が東に向かって移動していることを確認している。

第4章では、荒川中流域右岸、北武蔵地域、両総地域、その他の連弧文土器245個体の「文様割付の計測」をおこない、模式図を作成した。合わせて546個体の計測データを用いて全地域の分析をおこない、各地域間の比較検討をおこなった結果、北武蔵地域は多摩丘陵からの伝播を、両総地域へは武蔵野台地からの伝播を指摘した。両総地域では、磨消縄紋技法を取り入れて新たな適応を果たしたことを確認している。

第5章第1節では、連弧文土器の系譜問題について考察した。これまで出現期とされていたものより確実に古い最古段階の連弧文土器を確認し、この土器をミッシング・リンクとして捉えて、甲斐地域の曾利縄紋系土器の影響を受けて狐原遺跡で連弧文土器が成立し、それが多摩川上流域の出現期の連弧文土器へと繋がり、南西関東に伝播していくと論じた。さらに、甲斐地域から桂川・相模川を經由して相模野台地へと伝播していく別ルートが存在する可能性を指摘している。

第2節では連弧文土器の分布範囲について確認し、両総地域の連弧文土器が、南東北まで伝播していることを確認している。

第6章では、第1節で連弧文土器の変遷を出現期、盛行期、衰退期にわけて検討した。

第2節で、南西関東を中心とした遺跡で連弧文土器が受け入れられ、それぞれの地域で適応している有様から、縄紋中期の社会は閉鎖的なものではなく多様性を認める柔軟性をもった社会であろうと結論づけている。最後に、連弧文土器は型式として成り立つのかを検討した結果、山内清男の土器型式としては当てはまらないものの、系統型式として設定すべきであると結論づけ、型式名として「連弧文式土器」を提唱している。

今後の課題ともなるが、あらたな土器型式研究として「系統型式」を重視する必要性を強調している。

3 本論文の評価

(1) テーマ設定に関して

本研究は、縄紋時代中期後葉の連弧文土器が縄紋土器編年においてどのように位置づけられるか考察し、独立した土器型式として認めるべきかを検討するもので、目的としても当初に明確に示されており、縄紋研究の基盤をなす研究報告を示していると理解できる。よって、適切であると評価できる。

(2) 研究方法の適切性に関して

研究の方法として、連弧文土器について、①定量的分析を用いてその型式学的特徴を明らかにする、②その系譜について考察する、③出現期から衰退期に至るまでの展開の様相を明らかにする、の3点を踏まえることが示されており、その方法論も客観的かつ実証的であり、考古学、特に土器研究の方法論として適切である。

(3) 論文構成と論理性に関して

順序を踏まえた構成を持っており、記述の仕方も論理展開も適切である。

(4) 論文の形式に関して

考古学の研究として瑕疵はなく、適切である。

(5) 独自性と意義に関して

これまで定性的分析で語られることの多かった縄紋土器の型式学的特徴について、数量データを用いて定量的分析をおこなったことで、客観的な分析として提示していることが高く評価される。独自の研究視点を随所に示しており、独自性に優れている。新たな縄紋土器研究の可能性を示唆し、学術的意義が高い。

(6) 不正行為に関して

先行研究について適切に取り上げ、まとめており、剽窃、無断引用などは認められない。

4 全体評価

今後の課題としては、その結論において示された新たな型式設定について、さらなる議論が必要ではないかとの点が指摘される。提出者は、南関東地方縄紋時代中期の土器型式として「連弧文式」を新たに設定することを主張したが、連弧文土器が主体的に存在する遺跡がないことが本研究の中でも指摘されており、土器型式として十分な要件を備えていると言い切れるかに議論の余地があること、型式設定するとしても、従来の方であった標式遺跡を定めて研究史上の代表例を示すという方式をとらないことについて、学界のなかでの議論がさらに必要かと思われる。一方で、そうした視点は、時間空間の単位としての分類基準を重視する従来の山内清男型式論にこだわらない、系統型式を発展させた新たな土器型式研究を模索する方策と評価することができる。

また、データ分析において、大まかな傾向は把握できたといえるが、細部においては今後検討を重ねていくべきとの指摘もなされた。また、統計的手法として当該時期の特徴をよく捉えている面も指摘されたが、同時に器形と連弧文割付け法との関係など、さらに検討すべき点も指摘される。しかしそれは、本研究が今後も発展性を持っていることの裏返しであり、さらに地域や時期、分析対象を広げて検討を重ねていくことで、縄紋文化の実態がさらに明らかになっていくものと期待できる。

総合的にみて、各観点から見て不備・不正な部分はなく、内容的に高い学術水準に達しており、縄紋土器研究に大きく益する内容を備えた論文であるといえる。今後、こうした研究法をさらに続けることで、新たな考古学研究へと展開することが期待でき、日本考古学にとって大いに発展の礎となる研究と評価できる。

以上のように、縄紋土器研究については考古学研究論文として高い水準を持っており、その堅実な内容、実証的方法により導かれた整合的な結論、内在する課題を適切に示した将来への展望を含め、学位請求論文として合格に値すると判断される。よって、審査員一同一致して、提出者に博士（史学）学位を授与するべきとの結論に達した。